

# ものづくりを通じた地域との連携

～地域のまつりに参加して～

広島県立宮島工業高等学校  
定時制教頭 前原 廣榮

## 1 はじめに

本校が位置する広島県廿日市市大野地区では、25年前よりコミュニティー振興を目的に毎年6月、地域住民による手作りのまつりが開催されている。本校には6年前に会場の設営や運営での参加要請があり、実践的なものづくりを通じた地域貢献や、地域の方々との交流を深めることを目的として参加し、今日まで関わり続けている。今では恒例行事のようにして生徒たちに受け継がれ、3年生にもなると自然と「やらなければ」という雰囲気が出てきている。そんな生徒たちの思いは「先輩たちを超える」作品を残すことである。まつりの中での本校の役割も年々定着し、その責任感と地域の期待の大きさ、そしておしめない支援や交流の輪が生徒たちを成長させている。

進路選択を目前に控えた3年生1学期、また資格試験等が多く補習が必要なこの時期、両立させることの難しさやまつりに参加することの是非に悩むときもあるが、生徒達の達成感のある笑顔やクラスのまとまり、人格的な成長など様々なものを求めて、取り組み続けてきた5年間の様子を報告する。

## 2 まつりの概要と参加への経緯

### (1) まつりの概要

まつりは、毎年あじさいの咲き始める6月、第2土曜日、日曜日の二日間にわたって前夜祭・当日祭としては開催される。その時期があじさいの開花時期と重なるため、一般には「あじさいまつり」と呼ばれて親しまれてきた。会場は、ちゅーピーパーク（旧チチヤスハイパーク）と呼ばれるプール施設を利用させていただき、地元有志・団体によるバザーやステージでの催し物を中心に、毎年1万人以上の人を集めている。今でも参加者は増加し、会場設営やオブジェを担当する本校の生徒にとっても大きな見せ場である。

### (2) 参加への経緯

実行委員会からのまつりへの参加要請は、これまでの20年間の取り組みでマンネリ化しつつあるまつりに、若い力を取り入れ活性化を図りたい。また工業高校の専門性や若い感性を生かしてデザインや企画を考えてもらいたいというものであった。予算も大きく措置され初年度35万円程度、市町合併等により行政からの補助金が減額されたこともあり今年度は15万円まで減額されたが、高校生の取り組みとしては、切り詰めながらどうにか実施できる予算である。この予算措置が、自由な発想を引き出し、ものづくりを大きく支えてくれている。この他にも取り組みの期間中、地域の方々から差し入れや高校生では出来ない部分の手伝い等、十分な支援を頂いている。

## 3 作業の流れと5年間の主な取り組み

### (1) 作業の流れ

取組は課題研究の一部として位置付け、4月中旬に実行委員会からその年の基本方針の説明を受ける。その後現地調査に取り掛かり、企画・立案、まつり実行委員会に対するプレゼンテーションが行われる。ここで実行委員会の了承が得られたものを製作に移していくが、複雑なものはスタディーモデル製作や簡単な試作実験を行い実施設計図を作成する。学校では4週間前後の期間をかけて製作に取り組み、製作が終了するといよいよ会場への搬入設営である。現地での設営は概ね1週間程度であるが、事故を起こしてはいけないという緊張感と完成に向けての躍動感に溢れた期間でもある。

完成までの全工程は相当の作業時間であるが、課題研究の授業の他はほとんど放課後を利用し、休日に作業することも少なくない。この様な部活動と同じような連日の活動が、生徒には良い経験になって、やり終えた時の成就感・達成感をより深くより大きいものにしている。

### (2) 取組内容

毎年の取組の大まかな構成は次のようなものである。

- ・ ダイヤモンドプールのメインオブジェ（各年度のものを写真に掲載）。
  - ・ 流れるプールの装飾（折板構造や竹で作ったトンネル等各種装飾）。
  - ・ 入場門や保育園児によるあじさいの絵の展示等、装飾設営。
  - ・ メインステージの装飾設営。
  - ・ その他 会場運営補助。年度によっては水上アトラクション、木工品販売等を実施した。
- これらの取り組みを4～5グループの担当で構成し、担当職員が1、2名ついて指導できるように分

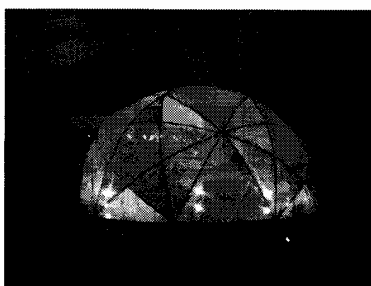
担している。ここ5年間、建築科職員全員が指導に当たることができたことも、取組を継続できた要因である。

### (3) 作品紹介

メインオブジェだけであるが、5年間のものを写真で紹介しておきたい。



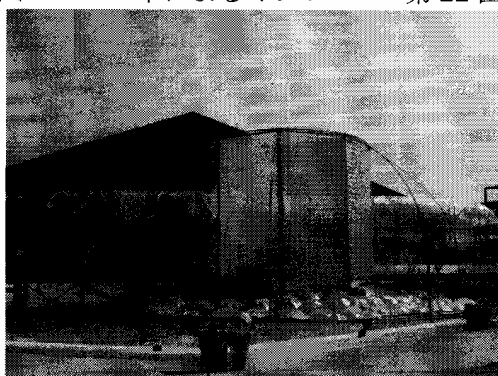
第21回 ビニール傘によるオブジェ



第22回 竹と布によるドーム



第23回 木製ドームと噴水



第24回 カラーテープのよるオブジェ



第25回 アーチ式ドームと球体

## 4 取組の成果

会場は二日間のまつりが終わるとすぐにプール開きの準備のために片づけに入るが、この僅かな期間のために、生徒も職員もそのエネルギーをひとつにして取り組みに集中している。その中で得られる成果をまとめると次のようなものである。

### (1) ものづくりの喜びと感動、課題研究への意欲の高まり

試行錯誤を繰り返しながら存分に力を発揮した生徒の顔は達成感にあふれている。また訪れた人に素直に評価してもらえることも生徒にかなりの自信を持たせている。やり終えた生徒たちの次の目標は、各自での課題研究の取組や進路の決定である。ここでの成果が就職試験で活かされ、課題研究でもよい作品を残すことなどにつながっていると確信している。

### (2) 人格形成とクラスとしての協調性

片付けまで入れて約2ヶ月間のものづくりではあるが、一人ひとりの生徒の成長が感じられ、一つ階段を上ったように思える。決して成功ばかりではない。失敗から自らの至らなさや力のなさを感じたり、人と協調することの難しさなど色々と考えさせられることもあれば、逆に友人の素晴らしさに気づかされ自分も負けずに頑張ろうと決意する生徒もいる。

またクラスでの共同作業は普段の触合いの何倍もの密度に相当し、良い面、悪い面含めて丸呑みできるような付き合いに変身していく。これらが体育祭や文化祭などの違った場面で協調性や一体感として発揮され、その効果を意外なところから評価してもらえることもある。

### (3) 地域の人との連携、工業高校に対する再認識・再評価

工業高校を、そして生徒を大切に付き合ってもらえる地域の人には常々感謝している。楽しく交流していただけるなかで、生徒も地域や大人社会からの期待の大きさを感じ取り、同時に責任の重さを知ることができる。そしてその期待に応えようとするなかで、地域での学校であることや自分たちが今学んでいることの意味を再確認することができる。

生徒の作品や姿を見て、感動してくれる人も多し、まつり会場で「何々を作って欲しい」といきなり、依頼されることもある。また、あじさいまつりに参加することを目的に入学してくる地元の生徒もいる。いずれにしても社会の中で、大切な価値を持つものの一つとして工業高校が再認識、再評価してもらえる場になることを願っている。